

[短報]

Gert Geißler 氏の「生徒の生産労働」の体験談

三 村 和 則

要旨

「生徒の生産労働」についてG. ガイスラー氏の体験談を、氏がテレビ雑誌に答えた内容により補足し紹介した。ガイスラー氏は東ドイツ時代から活躍しているドイツ教育史研究者である。

「生徒の生産労働」の実相の一端について次のようなことが明らかになった。

週1日通年で行われ、曜日は学校により違った。理論学習との関係で2週続くというケースがあった。労働内容の希望は生徒には聞かなかった。7・8年生の自動車工場では自動車を造るのではなく工具を製作した。農場でも農機具の製作を行い、収穫作業は繁忙期の手伝いに過ぎなかった。1980年代機械の高度化により生徒の機械使用が減少し、単純労働が増加するという矛盾が出ていた。生徒は危険な職場には配置されず、安全の配慮がなされていた。賃金は支払われなかったが、交通費負担はなく企業給食を無償または廉価で提供された。製品の質と製作時間は成績評価の対象となった。

キーワード：総合技術教育、生徒の生産労働、東ドイツ、インタビュー

1. はじめに

総合技術教育は労働と教育の結合により人格の全面発達をめざす教育のことである。それは東ドイツの10年制の義務教育学校を特徴づけるものであり、カリキュラムに7学年から10学年まで「生徒の生産労働」(Produktive Arbeit der Schüler。略称、PASまたはPA。)が設けられていた。そこでは生徒は学内の特別な施設または学外の一般の工場や農場で、午前中の理論学習の後、午後は実際の生産労働に従事した。この「生徒の生産労働」は旧東ドイツ国民の多くが東ドイツ時代の教育の中で評価するものの一つとしてあげているものである。だが一方ではその実態について、理念にほど遠く、生徒が安価な労働力として期待されていたという評価がなされる場合がある。果たしてその実相はいかなるものであったのか、その解明には興味が尽きない。

また「人格の全面発達」は、近代以降の教育が理想とした人間像である。その実現のための主要な方法の一つが生産労働と教育の結合である。そしてそれを学校制度として具現化し

たものが、総合技術教育であった。東ドイツの総合技術教育はたとえその実相がどのようなものであったとしても、近代以来の教育理想の帰結の姿であったことに違いはない。「生徒の生産労働」は総合技術教育の全体を語るものでは決してないが、その特徴を最もよく表現したものである。この点からも、教育学研究においてその実相を解明することの意義は大きい。(注1)

本稿では「生徒の生産労働」の実相に迫る研究として、2015年9月にガイスラー氏 (Prof. Dr. Gert Geißler) にその体験談のインタビューを行ったので、その内容を紹介する。

ところで幸運なことにインタビューの際、ガイスラー氏が以前 (2014年2月) に類似の質問内容でドイツ国内のテレビ雑誌『モニター』編集部からインタビューを受ける機会があったことがわかった。インタビューは文書にまとめられており、その文書を入手することができた。

両者の違いは、前者の実際に行ったインタビューがガイスラー氏の「生徒の生産労働」の個人的な体験談で、後者の『モニター』誌のインタビューはドイツ教育史研究者として「生徒の生産労働」の概要と一般論を述べた、という点である。

ガイスラー氏については略歴を後に掲げているが、彼は1948年生まれで1960年代に「生徒の生産労働」を体験し、一方で自らがその体験を対象化して研究する立場にあるドイツ教育史の研究者である。そのため、個人的体験談はそれ自体で非常に貴重な資料となるが、彼の場合その体験を教育史の文脈に位置づけ客観的に語るができるという点で、その価値が増すものとする。

本稿では、実際に行ったインタビューを主な素材としその内容を紹介することとする。そして、必要な範囲で雑誌のインタビューによりその内容を補うという体裁をとった。

2. インタビュー内容

インタビューは事前に質問事項をメールで送っておきガイスラー氏の勤務先であるベルリンのドイツ国際教育研究所附属教育史研究図書館で行った。

Q1 : PAS (生徒の生産労働) を体験したのはいつの時期か？

A : 1961年～1965年である。7年生が1961年9月に始まり、10年生が1965年8月に終わったということだ。

Q2 : 生徒は毎週1回だけPASに従事したのか？ PASは毎週1回だけ行われ、午前中まず「社会主義生産入門」と「製図」を学習し、午後に労働に従事し、その日は「社会主義的生産労働日」と呼ばれている、と日本では紹介されている。

A : 毎週1回制だった。集中講義的に一定期間にすべてまとめて行うということではなかった。曜日は同一曜日ではなく、学校で区々 (まちまち) だった。毎週工場や農場に通った。終日工場や農場で行われた。座学をする教室が工場や農場に設けられていた。しかし午前中は理論学習 (「社会主義生産入門」と「製図」) で午後は労働 (PA) というケースだけではなく、終日理論学習で翌週終日労働というケースや、理論学習が2週続きその後労働が2週続く

いうケースもあった。

Q 3：PASは各学年においてあるセメスターだけで行われたのかそれとも通年で行われたのか？

A：前期だけとか後期だけということではなく、通年で行われた。

Q 4：どこのどのような工場・農場のどの業種で労働したか？また実際にどのような労働に従事したか？

A：7年生の時はライブチヒ市内の学校のすぐ近くの自動車工場だった。しかし自動車を造るわけではない。工場でハンマーやペンチを製作した。たくさん作ったので余りはゴミとして捨てた。無駄になったし、無駄が多かった。国家として浪費だった。

8年生の時はよく憶えていないが、7年生と同じだった気がする。

9年生と10年生は農場だった。しかし、農場の中に農機具のメタル製品の製作部署があり、それらの製作に従事した。農場のラジオ放送の準備もしていた。

リンゴ狩りとかジャガイモ掘りはしたが、それは繁忙期の手伝いとして行っただけである。(Q農機具の修理などはしなかったか?) 農機具の修理などは自分たちはしなかった。

子ども心にはっきり憶えていることは、農場で収穫した作物をお腹いっぱい自由に食べることができたことだ。また農場なので、指導者の目が行き届きにくいので自由にすることができたのは楽しかった。

工場でも農場でも労働はそれほどハードではなかった。[強制労働ということでは断じてなかった、ということだ。—三村]

7年生・8年生の時は一般の労働者とは交わらなかった。9年生・10年生の時の農場では学年が上なので一般の労働者と一緒に働いた。

Q 5：どのような基準で工場・農場や業種は割り当てられたのか？学校の立地環境によって、学校単位で決まったと思うが、生徒の希望は聞いたか？

A：希望は聞かれなかった。学校単位なので聞くことはありえない。

Q 6：生徒には報酬はあったのか？

A：よく憶えていない。交通費の負担はなかった。製品の現物はもらうことがあった。

Q 7：これまでの人生を振り返ってみてPASをどのように評価するか？その経験はあなたの人生にいい影響をもたらしたか？

A：人生にとってネガティブに働いたことは全くない。毎週別の世界に行った気分になった。楽しかった。[学校以外の人ということか—三村] 違う人と知り合いになって、刺激になった。さらに目の前に製作物が姿をあらわすので生産すること自体を楽しく感じた。社会に対しても自然に対しても視野が広がった。

Q 8：当時工場の機械が子どもの体格のサイズに合わず大きすぎたためPASが期待通りの成果を挙げるができなかったと言われるが、どう考えるか？また、生徒を対象にした労働災害防止法の規則が整備されていなかったとも言われるが、どう考えるか？

A：体格のことはあまり感じなかった。複雑な機械は操作しなかった。操作する場合でも大

人が付いた。労働災害防止についてはむしろ子どもだからこそ大人以上に厳しかったのではないか。[労働災害防止について、災害防止のための規則の有無と生徒への適用との混同があるように思われる。－三村]

Q9: 生徒の生産労働の業種には第3次産業(流通や金融)がないが、どうしてだと考えるか?

A: DDR(東ドイツ)が続いていたら第3次産業も出てきただろう。第3次産業に低い位置づけをしていたわけではない。第1次・2次産業が主な社会だったからその経済発展の段階によったのだろう。

Q10: 失業があるのでそれがインセンティブになっている資本主義社会と違い、社会主義社会は生産や労働の動機づけに苦勞する社会なので、PASなどを通して、そのための教育に力が入れられたのではないか?つまり労働のインセンティブが働きにくい社会なので、自発的に労働する人間を育てるのがPASの大きな課題だったのではないだろうか?

A: 確かにそのねらいはあっただろう。

3. テレビ雑誌インタビューによる補足

ここではガイスラー氏が2014年2月に受けたテレビ雑誌『Monitor』編集部からのインタビューを、2で見た内容に関連する箇所の抄録を紹介し、その補足を行うこととする。なお注1にあるように、筆者には「生徒の生産労働」の実相に迫る研究として別稿があるので、なるべく内容の重複を避けて補うこととする。文中の[]は筆者の解説等である。

『Monitor』はドイツの公共放送統括団体ARDのテレビ雑誌である。ARDは、受信料制度で運営されるドイツ国内9つの地方公共放送団体により、テレビ・ラジオ放送の全国ネットを構成している。テレビ放送は"Erstes Deutsches Fernsehen"(第1ドイツテレビ)という名称で運営している。旧西ドイツ時代の1950年に開局している。

Q1: PAはDDR(東ドイツ)全体で統一的行われたのかそれとも地方行政区ごとに違いがあったのか?

A: レアプラン(Lehrplan 学習指導要領)はPAでは地域や企業や物的・人的条件に応じて違いが出ることをあらかじめ考慮に入れていた。他の教科と異なり、9学年と10学年のレアプランは好ましい大綱的性格を有していた。1983年のレアプランによると、10種類の企業体で実施された。すなわち、[①]金属加工工業、[②]電気/電子工学、[③]建設、[④]農業・林業・食品業、[⑤]農機具の修理、[⑥]化学工業、[⑦]紡績工業、[⑧]衣料工業、[⑨]皮革加工業、そして[⑩]木材加工業である。農業のPAではトラクターの運転免許試験に導くまでの教育も含んだ。

Q2: この授業はレアプランではどのくらいの時間だったのか?年代によって変化はあったか?

A: 統一のかつ義務的にすべての生徒に時間割表に1週間に1日生産授業日が設けられていた。現場への移動があるため、授業は7学年と8学年では3時間(その内2時間がPA)、9学年と10学年では4時間(その内2時間がPA)だった。1971/72年以降導入された時間割では

9学年と10学年は5時間になった。その内3時間がPAである。9学年と10学年ではESP（「社会主義生産入門」）とPAの授業が2週間交代で行われた。

Q3：生徒はどのような業種をあてがわれたか？

A：13歳（7年生）から16歳（10年生）の生徒のための学習場所は全部で5000以上の国営企業（人民所有企業）と集団農場（生産協同組合）と国営農場であった。基本的に参加しなかったのは、私企業あるいは半国営手工業そしてサービス業部門であった。構造的・組織的理由と特に政治的・訓育的理由からであった。生徒の労働なので、教育学観点の下で様々な労働段階に慎重に枝分けされた計画が存在した。

Q4：そこで生徒はどのような労働を行ったのか？

A：ESPでは、何よりも機械工学の基本が教えられ本質的な製造過程の概観が与えられた。PAでは、1980年代においては9学年と10学年の生徒の3分の2強は、細分化された金属加工工業と電気/電子工学のプランに従って労働した。7学年と8学年に工業や農業の企業で習得した基本的な能力と習熟の後で、個々の労働課題が計画された。労働課題は特に種々の機械の設置・手入れ・監視・監督、機械の補助活動、組み立てと修理、品質保証と管理、倉庫労働だった。企業の置かれた条件に従うので、それぞれで生徒の活動にはバリエーションがあった。

1980年代、特に工業分野で高価で完全な技術導入によって生徒の使用機会が減少した。生徒はその活動において洗練されていないからだ。そのため生産過程は、中身の乏しい要求の少ない単調な肉体活動が増え、教育学的かつ認識豊穰性の点からは乏しい意味しかないものになった。1980年代の9学年と10学年のレアプランは生徒を現代的な技術に導こうとしたが、現実には半分以上の生徒はそれに合った授業をほとんど受けることがなかった。

Q5：化学工業の分野での生徒の投入状況は？

A：化学工業でのPAは1960年代からすでに可能であった。選ばれた仕事場は労働保護・火災予防のための査察によって点検され証明されなければならなかった。生徒は労働課題を引き受ける際、基本的な操作手順・行為手順を実践的に教えられ、規則の厳守を絶えずしなければならなかった。

9学年と10学年のPAのために次の労働領域が選択肢として用意された。A：化学的生産部門（化学的又は物性・化学的過程の準備と管理及び生産物の充填。消費財生産まで含んだより広い生産領域での労働、品質保証・管理の実験室での労働の遂行）。B：維持補修部門（建物群の修理と組み立て、道具や機械の操作、監視そして手入れ）。

生徒は次のような工場で労働することは禁じられていた。工業規格に該当する有毒ガスや煙、粉塵、同様の作用がある物質に遭遇するような工場。自他の安全への高度な要請への対応と爆発の危険があると格付けしている限界値の遵守が恒常的になされず、安全が保証されていない工場。

生徒が化学工業部門で行う活動は多岐にわたった。装置の整理や工場の規則に従った原料の構成、装置の操作と操作手引き書に従った構成、装置の監視、工場の基準値の遵守に基づく構成、中間生産物や最終生産物の梱包、手入れや監視労働の遂行、さらにはフィルムと磁

気テープの製造と梱包、繊維と絹と導線と金属箔などの製造と梱包、プラスチック製品の製造と形成と接合あるいはそれらを運搬するためにタイヤを取り付けることである。実験室での労働では、量的分析や種々の物理的決定方法が重要であった。工場か生徒用仕事場のどちらかに用意された労働領域で、電気的な工場資材、ポンプ、ギア装置、ウインチ、車両用ジャッキ、滑車、遮断装置、そしてまた自動機械、小型輸送機、フォークリフト、原動機付き車両の修繕が行われた。

Q6：生徒に賃金は支払われたか？

A：企業によっては、9年生以上の生徒は、昼間の労働時間で学校に依存しない自分の希望で受け入れられかつ学校休暇中の労働には、賃金が支払われた。そのような「自由意志生産活動」はすべての国営企業で工場でも農場でも可能だった。[10年生の義務教育学校に接続する] 拡大上級学校 (EOS) 11年生の生徒には学年末の3週間可能な限り科学的生産労働 (WPA) を行う企業での生産出勤が計画されていた。その労働は課外活動で賃金が支払われるが、社会保障の出資義務はなかった。

ESP (社会主義生産入門) とPA (生徒の生産労働) の実施のための企業の会計は公開されていない。PA授業の収益は小物の「消費財生産」をする大企業は1981年以来証明する任務を課されたので、部分的には国民経済上の肯定的な効果があったとして文書で明らかにされた。総合技術授業では例えば室内灯、壁はしご本棚、歩道プレート、公園のベンチ、圧縮装置、角椅子、手持ち丸鋸そして多目的鋤を生産していた。

企業は休暇中の催しやPAのための教室の設置、教材の供与などで学校を支援した。生徒は無料又は非常に値引きされた額で企業給食をあてがわれた。

Q7：労働条件、労働ノルマ、罰則はどうだったか？

A：生徒の成績は一つの教科 [「生徒の生産労働」] にまとめられて成績証明が記録された。評価は課題解決にかかった時間と労働成果物の質の観点からも行われた。質については、評価3は欠陥が少ない。評価4は欠陥が多い。評点5は欠陥が著しく多い。点数を付けることは「図式的」で行うべきではなく、教育学的にすべての状況を考慮して行うべきであるとされた。総合技術授業のレアプランに方向付けられた遂行とそのために計画された物的条件の保障は企業の責任であった。

Q8：どのくらいの数の生徒がPAに参加していたか？

A：7年生から10年生について1学年あたり約20万人前後の生徒がいた。その規模でPAは展開されていた。

4. ガイスラー氏について

ガイスラー氏の略歴と現在の主要研究分野は次の通りである。(注2)

(1) 略歴

- ・1948年生まれ
- ・1977-1990年 東ドイツ教育科学アカデミー (APW) の大学院生、その後APWの学術協

力者 (wissenschaftlicher Mitarbeiter)

1981年 1925年から1933年までのドイツとソビエト連邦の間の教育政策と教育学の関係により博士号

1988年 1848年革命までのF.A.W.ディスターベークの業績により大学教授職資格

・1991-2013年 ドイツ国際教育研究所 (DIPF, Deutsches Institut für Internationale Pädagogische Forschung, BBFの母体) 学術協力者

・1994年ベルリン・フンボルト大学講師

・2002-2012年ベルリン・フンボルト大学員外教授

・2015年現在: ドイツ国際教育研究所附属教育史研究図書館 (BBF, Bibliothek für Bildungsgeschichtliche Forschung) 準研究員 (assoziierte Wissenschaftler) 兼ベルリン・フンボルト大学員外教授職 (2013年から退職身分)

(2) 主要研究分野

・19世紀と20世紀のドイツ学校史

・第二次大戦後のドイツのソビエト連邦占領地区と東ドイツの学校と教育科学の歴史

5. おわりに

まず、「生徒の生産労働」(PA)の実相について今回のインタビューで明らかになったことや確認できたことがいくつかあった。次の通りである。

実施期間について、週1日通年で行われ、集中講義的に行うということではないこと、しかし、原則午前中に行う理論学習(「社会主義生産入門」と「製図」)との関係では、9・10学年では終日理論学習で翌週は終日PAというケースや、理論学習が2週続きその後PAが2週続くというケースがあったこと、曜日は学校によって違ったことがわかった。

PAの業種や労働内容について、学校単位での実施のため生徒の希望を聞くことはなかったこと、7・8年生時の場合、自動車工場で行っても自動車自体を造るのではなく工具を製作したこと、9・10年生時の場合、農場であっても農機具の金属製品の製作を行ったこと、収穫作業はしたが、それは繁忙期の手伝いとして行うに過ぎなかったことなどがわかった。

1980年代のこととして、5000以上の国営企業と集団農場と国営農場において、10種類の企業体で実施されたことがわかった。しかし一方で、工場機械の高度化により生徒の機械使用機会が減少し、単調な肉体労働が増加するという矛盾が生まれていたことがわかった。

労働環境について、有毒物質や爆発の危険から遠ざけられるなど、安全への配慮が十分になされていたことがわかった。

労働の対価としての報酬について、賃金は支払われなかったこと、しかし交通費負担はなく、一般労働者の企業給食を無料又は値引き額で提供されたことがわかった。

PAの成績について、製品の質と製作に要した時間も評価の対象になっていたことがわかった。

次に、今回のインタビューを通して以下のようなPAの実相に関する新たな疑問も出てきた。

- ・9・10学年でESPとPAが2週間交代で行われていたことについての詳細。
- ・同一工場・農場への生徒の受け入れは一つの学校かそれとも複数の学校の生徒の受け入れだったか。
- ・農場でのPAの場合、単調な農作物の収穫作業が正規授業として行われたという誤解が生じがちである。しかし確かにレアプランには農作物の収穫作業は存在しない。ガイスラー氏も否定している。しかし他の例において実際はどうだったのかを確認する必要がある。
- ・生徒の労働災害防止について、十分に配慮されたことは理解できたが、生徒の工場・農場での事故の有無の確認。また、災害防止の法律が一般労働者同様生徒にも適用される法律だったか否か。これには筆者の先行研究とガイスラー氏の言に矛盾があった。
- ・9年生から可能になる学校休暇中に実施され賃金も支払われたという「自由意志生産活動」について、参加生徒数や範囲など実施された規模について。
- ・PAの評価方法についての詳細。製作した製品の質や要した時間の他の観点、特に労働意欲や態度や協調性など訓育的な観点についてはどうだったか。
- ・テレビ雑誌は化学工業でのPAに関心を強く示していたが、そのことの意味は何か。
- ・企業ならびに国家経済上のPAに係る収支決算。ガイスラー氏はハンマーなどを大量に製作したため余りは捨て、国家として浪費だったと述べていた。
- ・PAの業種が第1次・第2次産業に偏し第3次産業が無かった理由。ガイスラー氏は経済発展の段階に対応したからと推論を述べていた。
- ・労働の動機づけの働きにくい計画経済社会であったため自発的な労働意欲を育てることもPAの大きな課題だったと考えられる。そのことの確認。

これらの疑問の解決は今後の課題としたい。

今回のインタビューを通して以上のような成果があった。しかし別の次元でも、大きな収穫が2点あったと考える。

第1点は、総合技術教育が東ドイツという消滅した国の教育であるため全否定的に理解されがちなか中、PAの経験をガイスラー氏が極めて肯定的に捉えていた点である。定年退職を迎える年齢の氏がこれまでの人生にとってたいへん有意義であり、ネガティブに働いたことは全くないと回答しているのだ。人は暗かったことより明るかったことを積極的に話したが。このことは今後も実相研究の一環としてインタビューを行うことを計画する際、弾みとなる。

第2点は、旧西ドイツのテレビ局がPAに関心を示しており、インタビューの質問項目が筆者と多くの点で共通していることがわかったことだ。この事実は、PAには未解明の内容がまだ多く残され、人々の関心を集める魅力も存在していることを物語っている。またそれは、筆者の関心の方向が妥当性を欠くものではないことの証左となっているように思う。

注

1. この問題関心から「生徒の生産労働」の実相に迫る研究として筆者には次の稿がある。「ドイツ総合技術教育実践の実相－1970年代初頭の「生徒の生産労働」の場合－(資料紹介)」『沖

縄国際大学『人間福祉研究』第11巻第1号、2015年3月。

2. ガイスラー氏については下記の資料・文献を参照した。

①BBFのHP(<http://bbf.dipf.de/forschung/forschungsteam> 2015/12/28)

②Gert Geißler(2015) : Schule und Erziehung in der DDR. 2.Auflage ,Landeszentrale für politische Bildung Thülingen, Erfurt.

③Gert Geißler(2013) : Schulgeschichte in Deutschland Von den Anfängen bis in die Gegenwart,Peter Lang,Frankfurt am Main.

謝辞

本稿は2015年度沖縄国際大学特別研究費（その他の研究）による成果である。記して感謝申し上げたい。またベルリンにて私のつたないドイツ語能力を通訳者として補っていただいた、松本弦様（ベルリン・フンボルト大学院修士課程学生）に感謝申し上げたい。

[Kurzer Bericht]

Der Erlebnisbericht über “die produktive Arbeit der Schüler” bei Prof. Dr. Gert Geißler.

Kazunori Mimura

Abstract

Ich mache die Erfahrungen von Prof. Dr. Gert Geißler über " die produktive Arbeit der Schüler"(PA) bekannt und ich ergänze sie durch das, was er zu dem TV-Magazin beantwortet. Er ist ein deutscher Bildungsgeschichteforscher, der seit der Ära DDR (Ost-Deutschland) aktiv gewesen ist.

Für Realität der " produktiven Arbeit der Schüler " wurde klar, wie die folgenden.

Sie wurde für das Jahr getan. Tag der Woche war anders von der Schulen. Sie wurde einmal pro Woche durchgeführt, aber gibt es den Fall, dass fand sie nach zwei Wochen in Bezug auf die theoretische Studie. Die Hoffnung auf den Arbeitsinhalt der Studenten wurden nicht gehört. In der Klassen 7 und 8 der Autofabrik wurde sie Werkzeug hergestellt, ohne ein Auto zu schaffen. Führt die Produktion von landwirtschaftlichen Maschinen auf dem Betrieb der Landwirtschaft, Ernten Arbeit war nur die Hauptsaison zu helfen. Mechanische Verwendung von Studierenden wird in den 1980er durch die Komplexität der Maschinen verringert, war es den Widerspruch, dass einfache Arbeit wird erhöht. Die Studenten werden nicht in einer gefährlichen Arbeitsplatzanordnung zu sein, hat sich die Aufmerksamkeit auf die Sicherheit durchgeführt. Die Löhne wurden nicht bezahlt. Allerdings waren die Transportkosten frei charge. Und war eine Betriebspeisung in der kostenlos oder kostengünstig angeboten. Qualität und Produktionszeit des Produkts war Gegenstand der Leistungsbewertung.

Stichwörter Polytechnische Bildung und Erziehung , prudutive Arbeit der Schüler, DDR (Ost-Deutschland) , Interview